

「歌劇《カルメン》 オペラ・コミック版」

☆☆☆

★

2008（平成20）年12月24日鑑賞
梅田ブルク7>

指揮：アントニオ・パッパーノ

ロイヤル・オペラ合唱団

ロイヤル・オペラ・ハウス管弦楽団

カルメン（タバコ工場で働く女）／アンナ・カテリーナ・アントナッチ（ソプラノ、メゾソプラノ）

ドン・ホセ（衛兵の伍長）／ヨナス・カウフマン（テノール）

ミカエラ（ドン・ホセの婚約者）／ノラ・アンセレム（ソプラノ）

エスカミーリョ（闘牛士）／イルデブランド・ダルカンジェロ（バス、バリトン）

2007年上演・Livespire（オペラ）・155分

配給/ソニー

<ロイヤル・オペラ・ハウスとは？グランドボーン音楽祭とは？>

イギリスのロイヤル・オペラ・ハウスの詳しい歴史は知らないが、1858年ロンドン中心部に建設されたという現在の劇場は世界最高峰のオペラ・ハウスとして有名。

しかし、グランドボーン音楽祭ってナニ？これは、ロンドンから南へ約80キロにあるイースト・サセックスにあるオペラ・ハウスで行われる音楽祭とのこと。そして、1934年のオープニングから今日まで一貫して芸術的に高いレベルで続いているのが、このグランドボーン音楽祭とのことだ。妻にプロの歌手を持った資産家のジョン・クリスティが英国にオペラを根付かせるため、自宅の敷地内に約300席のオペラ・ハウスを建設したのが始まりというから、さすが英国は芸術の国！

<「Livespire」とは？>

「ゲキ×シネ」とは演劇の映像を映画館で観る、演劇と映画の新たな融合という新感覚のエンターテインメントのこと。また「シネマ歌舞伎」とは、歌舞伎の舞台公演をHD高性能カメラで撮影しスクリーンに上映するというもので、松竹が開発したもの。

それに対して、ソニー株式会社が2008年5月から取り組むデジタルライブコンテンツ製作配給サービスが「Livespire（ライブスパイア）」。これは「Live（ライブイベント）」を「Inspire（鼓舞・刺激）」するという意味の造語で、ソニー株式会社の商標とのことだ。

そんなソニー株式会社の「Livespire」の配給によって実現したのが、グランドボーン音楽祭×ロイヤル・オペラ・ハウスのオペラの映像版！オペラを舞台で観るのは費用的にも時間的にも大変だが、それをスクリーン上で観て聴くことができたら・・・。そんな私にとって夢のような企画が現実となり、今日はその第1弾『カルメン』を鑑賞することに。よく知っているストーリーであり、またこれまで何度も舞台や映像で観たものだが、スクリーン上で観るグランドボーン音楽祭×ロイヤル・オペラ・ハウスによる迫力の演技と歌声の魅力にたちまちドブ

リと。

<これぞ魔性の女！カルメンの肉感性にゾッコン！>

宮崎あおい演ずる『篤姫』が、2008年のNHK大河ドラマとして大ヒットしたのは私には予想外。そもそも10代から40代までの篤姫を20歳になったばかりの宮崎あおいが演ずるのはムリがあるのは当たり前。もっとも日本の時代劇はみんな和服だし、韓国の時代劇もチマチョゴリで肌を見せないから女性の肉体的特徴はあまり外に出ないが、08年にヒットした『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）や『ブーリン家の姉妹』（08年）など、ヨーロッパの時代劇における女性のドレスはウエストの細さや胸の膨らみを強調しているから、どうしてもある程度肉感性が必要・・・？トルストイの名作『戦争と平和』でもオードリー・ヘプバーンがナターシャに扮したハリウッド版（56年）と、リュドミラ・サベリエワがナターシャを演じたソ連版（65年）では、その肉感性に大きな違いがある。

しかして、魔性の女として世界一有名なカルメンを演ずるには、第1に肉体的豊かさ、第2に男を誘う妖しい目が必要だが、そんな要求にピッタリのソプラノ歌手がイタリア人のアンナ・カテリーナ・アントナッチ。これをいくら若手トップの名女優とはいえ宮崎あおいが演じたのでは、子供の学芸会になってしまうだろう。やはり魔性の女カルメンを堂々と演ずるには、ドレスの胸元から覗かせるあの豊かな乳房が不可欠。そしてまた、ウソ八百を並べ立てて男を誘惑し騙す技術と、口ほどにモノを言う瞳の妖しさが必要。そんな魔性の女にピッタリの女優兼ソプラノ歌手の起用が、このオペラ成功の第1の要因だ。

<ミカエラはもう少し魅力的にしてほしかった・・・>

有名な序曲が演奏された後、スクリーンに登場するのはカルメンではなく、「美しいお嬢さん」のミカエラ（ノラ・アンセレム）。彼女はセビリアのタバコ工場で衛兵をしている伍長のドン・ホセ（ヨナス・カウフマン）に、お母さんからの伝言を伝えるためにやってきたもの。スケベ心いっぱいの衛兵たちはそんなミカエラに対してちょっかいを出す、貞淑なミカエラはそんな誘惑に負けるはずはない。

それはそれでいいのだが、私の目にはこのミカエラの魅力がイマイチ。できることなら「美しいお嬢さん」と衛兵たちから歌われるにふさわしく、もう少し魅力的なミカエラにしてほしかったが・・・。

しかし、その後登場したカルメンは、衛兵のドン・ホセが自分の魅力に気づいてないと見るや、がぜん対抗心を燃やしてバラ（カーネーション？）の花を投げてドン・ホセを挑発。しかして、カルメンの思惑どおり、ドン・ホセはこの一撃でたちまちダウン。そしてあとは、皆さんご承知のストーリーへ。

<『カルメン』は、フランスオペラ！>

『カルメン』はスペイン人であるビゼー作曲のイメージが強い。闘牛士が登場したり、カルメンは情熱的なジプシー女だからスペイン語のオペラというイメージがある。しかし『カルメン』はフランス人のアンリ・メイヤックとリュドヴィク・アレヴィの小説『カルメン』を脚本化したもので、フランス語によるフランスオペラ。もっとも、舞台はセビリアだから、スペインの薫りがプンプン・・・？

<ドン・ホセはアホな男の典型？>

『カルメン』は早くから日本に取り入れられ大正時代に浅草オペラでも上演されたため、日本人には最もポピュラーなオペラだが、その後ずっと日本人に愛され続けているのは、ドン・ホセが魔性の女に騙されるアホな男の典型だから・・・？

セビリアのタバコ工場働く女カルメンが同僚たちとケンカ騒ぎを起こして殺傷ざたになり、その結果、牢屋送りとなったカルメンの護送を命じられたのが伍長のドン・ホセ。このオペラの最初に面白いところは、ドン・ホセがまんまとカルメンの色仕掛けの口車に乗せられて、カルメンを逃がしてしまう場面。せっかく故郷から婚約者のミカエラがやってきたところなのに、いとも簡単にカルメンの色香に誘惑され職務を放棄してしまう姿は何度みても衝撃的。待ち合わせ場所と定めた酒場でうまく落ち合うことはできるのだが、それがドン・ホセの人生転落の始まりになるうとは・・・。

以降、①ダンカイロをリーダーとするジプシーの密輸団への参加、②闘牛士エスカミーリョ（イルデブランド・ダルカンジェロ）へのカルメンの心移り、そして③闘牛場で復縁を迫るドン・ホセに対して、あくまでそれを拒絶するカルメンの殺害、と不幸な出来事が連鎖していくのだが、これはすべてカルメンの魔性とドン・ホセのアホさ加減のせい・・・。

<エスカミーリョのカッコ良さには誰でもゾッコン？>

私には闘牛士の技量がどこではかれるのかよくわかわからないが、その姿や立ち居振る舞いがカッコいいことはまちがいない。また、エスカミーリョが当時の闘牛士の中でどれくらいの序列だったのかも知らないが、女たちの憧れの的であるカッコいい闘牛士のエスカミーリョからいきなり「愛してる」とモーションをかけられたら、恋多き女カルメンがコロリと参ったのは当然。そうならば、いくらドン・ホセが復縁を迫ってもダメだし、嫉妬心に狂うドン・ホセがしつこく迫れば迫るほど、カルメンがうっとりしく感じたのは当然。

エスカミーリョが歌う『闘牛士の歌』は、『前奏曲』や『ノバネラ（恋は野の鳥）』と並んで最も有名な曲だが、こんなカッコいいエスカミーリョからこんなカッコいい歌を歌われたら、誰だってエスカミーリョを応援するのは当然・・・。

<UKオペラの楽しさをタップリと！>

劇団四季のミュージカルが最近観劇料を値下げしたことが大きな話題を読んだが、オペラをS席で鑑賞しようとするれば1万5000円が相場。そのうえ、日程を早くから決めてチケットを購入しておくことが不可欠。また、いくらい席に座ってもそこから見える舞台空間は一定だから、アップで観たい時にはオペラグラスを使わなければならない。ところが「ゲキ×シネ」や「シネマ歌舞伎」と同じく、このUKオペラ「Livespire」は何台も設置されたカメラに映し出される映像が常にベストのポジションで提供されるから、観客はスクリーンに映る映像と大きく開いて歌われる口元をアップで見ることが出来る。したがって、その迫力は満点。もちろん、アップの効用は顔の表情や口元だけではなく、カルメンの胸元にも・・・。

1934年に始まったグランドボーン音楽祭は「革新」がキーワードらしいが、今の時代状況に対応した革新性の実践の1つがオペラを映画館のスクリーンで上映すること。これにより大量の字幕付きのスクリーンで、いつでも安く、すごいスタッフと出演者による超一流のオペラを鑑賞することができるわけだ。今日観た『カルメン』は年末年始における梅田ブルク7の特集の第1弾だが、今後の予定は『フィガロの結婚』『ヘンゼルとグレーテル』『ジュリオ・チェーザレ』の3本。これらすべて鑑賞するのは大変だが、こんな機会であれば鑑賞できないから、すべてきっちり鑑賞しなければ。

2009（平成21）年1月6日記